クレヨン

サヤカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレヨン

【Ｎコード】
Ｎ５０４５Ｌ

【作者名】
サヤカ

【あらすじ】
化粧品がないなら、クレヨンで描けばいいじゃない

化粧品を揃えるのが面倒すぎて死にそう、と彼氏に愚痴れば、明るい口調ですぐに返事がきた。
「クレヨンで描けばいいじゃない」
美緒は呆れたが、こぼれた溜息は思いのほか小さかった。こんな切り返しが来るのは、珍しいことではない。そのたびに毒気がすっかり抜かれてしまうのだから、自分たちの関係は長く続いているのだろうと、納得すらしてしまう。慎吾にはそういう力があった。
瀬名慎吾はただの学生で、春から社会人になった美緒よりふたつ年下の恋人だった。
ひょろりと長い体に、インドア嗜好を体言するような色白の肌。特徴と言えばそんなもので、顔はどちらかといえば垢抜けない。美容と健康に人一倍気を遣い、常に周囲に気を配ることばかりを考えてしまう美緒とは、性格も価値観も真逆である。
彼は美術に興味がある。それもまた、美緒には理解できない世界のひとつだ。
慎吾は消したままのテレビの前で、床に置いたテーブルについてあぐらをかいている。台所にいる美緒が、紅茶を淹れて戻ってくるのを、よくしつけられた犬のように大人しく待ちながら、言葉だけはマイペースに続けていった。
「今日、そこの公園でさ、子供の絵画教室みたいなのが、スケッチに来てたんだ。で、その先生がすごかったの。クレヨンなんて、色が混ぜにくくて使いにくいのに、あそこまでできるんだって思ったよ。景色のアタリを正確にとって、奇抜な色で思い切り塗ってたんだけど」
「ねえ慎吾。今は私の化粧の話をしているのであって、あなたの趣味の話をしているんじゃなかったと思うんだけど？」

「ああ、ごめんね。でも似てないかな。美緒も奇抜な色を使って、印象を変える。瞼を緑に塗ろうって最初に言い出したのって誰なんだろうね。なのにとても綺麗なんだから、ファッションもメイクも芸術だよ」
「ならあなたは、もうちょっとファッションに気を使いなさいよ」
「まあいいじゃない。今は美緒だってちょっとひどい」
「うるさい」
同棲を始めたのは学生時代のことで、もっと言えば、付き合い始めて間もない頃から共に暮らしている。
完璧主義者の美緒は、自分の隙を他人に見せることを嫌う。なのにこの慎吾にだけは、心を開くのが楽だった。彼氏と長くつきあうことになろうと女は捨てまいと、昔は固く誓っていたというのに、どんどん家でくつろぐ格好が手抜きになっていっている。
風呂上がりの今はメイクも落とし、乾かしたばかりの髪もカーラーで巻いて、さらに言えば着ているのはジャージである。この姿でお湯を沸かす事はすっかり日課になってしまったが、慎吾はまったく咎めない。むしろ、素の部分を見せれば見せるほど、嬉しそうに、にこにこと笑う。
慎吾は決してしっかりしているわけではなく、金の管理も、家事も成績も、将来の指針さえもあやふやで、雰囲気に流されるように生きている。なんでもかんでも計画をたてなければ落ち着かない美緒とはここも真逆で、はっきり言えば頼りない。
だが、なぜだか、時々ひどく包容力を感じさせる。背伸びして、ピンと張り切ってしまった背中の筋を、温めてほぐしてくれるような、不思議な力がある。
お湯が沸くのを知らせる音が鳴る。美緒はティーポットに葉を入れて、熱い湯を注いだ。ノンカフェインのフレーバー・ティー。この手のものを嫌う男性は多いが、慎吾はなにも文句を言わない。たいていのものは幸せそうに食べて、幸せそうに飲む。
何に悩んで生きているのだろうと、思わないこともない。

「その勢いでクレヨン買って来ちゃった。世界堂を通ったし」
「私はアイブロウの方が欲しかったけどね」
会話を続けながら、紅茶を持ってテーブルに戻る。ローズヒップのほのかな香りと、薄く広がった湯気の湿気と、クレヨンの懐かしい匂いが同時に鼻先をくすぐった。
慎吾が床に広げていたクレヨンは、美緒が小学生の時に使った、十二色セットなどとはやはり雰囲気が違う。教材というよりははっきりと画材らしい、シンプルなデザインである。一握りでは収まらない数の色が、ビニール袋を敷いた上に並べられていた。掃除が大変だから床に画材は極力置くな、という命令は、ぎりぎりで守ってくれているらしい。
慎吾はクレヨンにそっと指先で触れながら、うっとりと呟いた。
「先生が先生だからかな。公園に来てた子供たちは、太陽をピンクで塗ったり、緑で塗ったり、すごく自由だった。俺は子供のころ、赤以外で塗ったら、違うよって注意されたから、つまらなかったんだ」
別に赤でいいじゃないかと思ってしまうのは、自分に絵心がないからだろうかと美緒は思った。子供のころ、お気に入りの塗り絵を父に貸したら、大好きなセーラームーンの髪の色が紫になってしまったという大惨事を思い出して、不思議な気持ちになった。
「今の慎吾だったらどんな色で塗るの？」
「紫」
きっぱりと断言する彼の横顔を見て、心でも読まれてしまったのかときょとんとする。だが、続く慎吾の言葉は、父とも塗り絵ともまったく関係がないものだった。
「紫外線って、紫の外の線って書くんでしょ。そう聞いてから、紫っぽいイメージがしみついちゃって」
「紫外線」
嫌な単語を聞いて美緒はうんざりとした。日焼け止めクリームのストックはまだあるし、つけるのをやめるわけにはいかないが、あ

れは肌に負担がかかるので好きではない。
「赤外線は赤く塗るわけ？」
あきれ混じりにそう言って話題をそらす。慎吾は楽しそうにうーんと唸った。
「赤外線を絵にするという発想がなかなかいいね。美緒はけっこう芸術家かもしれない」
「冗談」
「ほんとだよ。だってほら、化粧も上手い」
褒められているのだとは分かっていたが、釈然としないものを感じて、素顔を突きつけてジロリとにらむ。慎吾は苦笑して、失言をわびた。
「別に素顔がかわいくないって言ってるわけじゃないって。絵ってさ、どんなに抽象的でワケ分からないものでも、結局は現実を反映してるんだと思うんだよね。俺の目で見た世界が、俺の筆になるし、君も同じ」
「いきなりなに？」
「美緒は自分の美しさをよく知っていて、それを生かす術を分かってるから、素顔をもっと綺麗に見せることができるんだよ」
恥ずかしげもなく間近でそう言われるのは、珍しいことではない。だが、照れくさいと言えば照れくさかった。美緒はごまかすように目を逸らして、呟く。
「だったら、世の女の子はみんな芸術家よ。自分を綺麗に見せることしか考えてないもの」
「でも、美緒がいちばん綺麗だよ」
「いまさら口説いてるの？」
「好きな人を褒めるのって、楽しいもの」
極めて素直な口調でそう言いながら、慎吾は美緒の髪を梳いて、その身を引き寄せた。
「でも、素顔が綺麗なことは俺の秘密にしておくんだ。もったいないから」

素肌を滑る指の、節くれ立った感触を意識する。紅茶で濡れた唇が触れ合って、クレヨンの匂いが遠くなる。
「素肌が綺麗なことも、秘密にしておきたいしね」
エロガキ、と呟きながら、美緒は慎吾の背中に手を回した。

あたたかい温もりにくるまれて、幸せな気持ちで眠った。だが不快感にぞくりとして目が醒めた。――豆電球だけを残して明かりを消した部屋。目が慣れるまではよく見えなかったが、誰かが自分に覆い被さっているのは分かった。
誰か、と特定するまでもない。当然、慎吾だ。隣で眠っていたはずの彼が、起きて、こちらの顔をのぞき込んでいる……いや、違う。美緒は唇に触れる奇妙な感触を意識しながら、逆光にぼやけた彼の視線を追う。こちらの顔を見てるのではない。顔のごく一部、唇を一心に見つめながら、手を動かしていた。柔らかいような、堅いような奇妙な圧力が彼の手の動きに併せて、美緒の唇を移動した。
「……ん……っ！？」
声を出そうと口を開くと、唇をなぞっていた何かの先端が、ずるりと咥内に滑ってしまう。変な味がした。気持ち悪くて、思わず振り払うように吐き出した。むせるように顔を背けるが、唇から離れた冷たい感触は、今度は瞼の横にトンと置かれた。
「しん……ご？」
寝起きの頭を回転させて、美緒は顔をあげる。間違いなく慎吾だ。ベッドに横になっている時に、布団の中でこれだけ間近に見る存在など、彼以外にいないし、絶対に間違えない。
だけど、なんだか雰囲気が違った。
慎吾は目をさましたこちらの顔を見て、いつものように優しく、だけど少しだけ気まずそうに笑った。なんの悩みもなさそうな笑顔、ではなかった。どこか憂愁に陰った表情だ。

「ごめん、起こして」
小さく囁きながら、彼は唇からこぼれていた美緒の唾液を左手の指で拭った。右手に握られているものは、クレヨンだった。
それが何色であるかは、部屋の照明の関係で判別できなかった。だが美緒は愕然とする。クレヨンの先端が自分の唾で塗れている。口紅だって、こんなに派手にくわえてしまったことはないのに。
慎吾は右手をサイドテーブルの方にうんと伸ばした。いつのまにか置かれていた大量のクレヨンから、他の色を選び取った。
それをゆっくりと美緒に近づけて、肌色と近づけてから悩むように眉を寄せる。彼の本気を感じ取って、美緒はその動きを制しようとした。だが、組み敷かれてしまえばどちらに分があるかなど、知れているし、知っている。
「何してるのよ」
この状況で勝てるとしたら口だけだ。美緒は凄みを利かせた声でそう言って、恋人を睨みあげた。鏡があるわけではないので推測だが、この男は本気で、クレヨンを用いて女を飾りあげようとしているのだ！
「ふざけないで。気持ち悪いし、肌が荒れる」
「クレヨンが幼稚園の教材に使われるのは、無毒だからだよ」
慎吾はこちらの言葉を気にした様子もなく、返事をくれた。
「肌に乗せても、口に入れても、別に大丈夫」
「大丈夫なわけないでしょ！」
美緒は常日頃、肌に悪い栄養を徹底的に避けていた。体内からも体外からも絶対に近づけない。それを、よりにもよってクレヨンとは。
怒りが沸き上がるが、慎吾がふっと目を細めたので、口に出すタイミングを逃す。
「たしかに、難しいね。うまく発色しないや」
「当たり前でしょ。というか、それ以前に」
「どうしてダメなのかな。いや……俺はなにがしたいのかな」

こちらの声を遮って慎吾は嘆いた。そんなことはこっちが聞きたいと、言い返そうとしたが、慎吾の言葉が続いてそれを遮った。
「美しいものを、もっと美しく描きたいのかな。美しさを引き立てたいのかな。美しいものを醜く描きたいのか、醜いものを美しく描きたいのか……好きな人の外見を描きたいのか中身を描きたいのか」
早口言葉のような声が、この上なく真剣に綴られていくことに、美緒は驚いていた。
「太陽は赤なのか白なのか紫なのか、赤外線は見えるのか見えないのか、美緒はどこまで美緒なのか」
「慎吾？」
淡々とした言葉にぞっとして、美緒はおそるおそる名前を呼んだ。尋常でない気がした。
「女性は、賢いよ」
別人のように静かな声。
「自分の美しさを知っていて、疑いなくそれを引き立てて、美しく見せるという目的意識を内包してる。……俺には、それはないからね」
「何を言ってるの？」
「俺は、何を描きたいのかな」
慎吾はクレヨンを枕の隣に置き捨てて、美緒の身体に自分の体重を押しつけるようにして、距離を縮めた。温かい素肌が触れ合って、熱く燃えるようなこの感触は、よく知っている。ぞくぞくするほどの快感も知らないわけではない。
だが、彼の身体に閉じこめられながら、圧倒的な未知にぞっとするのは、初めてだった。
「一番好きな人を、飾るくらいなら、できると思ったんだけどな……」
彼の中にある苛立ちの正体が、分からなかった。
だから、もっとも直接的な手段を取るしかなかった。近づいてきた恋人の唇を受け入れると、当然紅茶の味など、もうどこにもない。

自分の唇についていたクレヨンの感触に戸惑いながら、ぬくもりを重ね合わせた。
明かりを落とした部屋の中で抱き合いながら、顔にクレヨンで落書きをされているというのだから滑稽だ。だが慎吾は笑わなかった。いつも微笑んでいたのに、笑わなかった。

美緒が眠っている間に終わらせたかったんだ、と彼は白状した。
「ごめんね。よく分からないけど……描かずにはいられなくて」
狭いベッドの中で寄り添いながら、慎吾は天井を眺めながら隣の美緒に囁いた。
「公園の子供たちを見て、小さな時のこと、思い出したんだ。そして、いい歳してクレヨンなんか握ったおっさんが、びっくりするほど意味不明で素敵な絵を描いてたことに、本当に衝撃を受けた」
美緒は、慎吾の昔話をほとんど聞いたことがなかった。特に裕福でも貧しくもない普通の家庭で、母親と姉という権力者にてんてこまいの父親を見つめながら、それを反面教師に楽な身の振る舞い方を学んでいったとか、その程度の雑談でしか知らない。だから、彼が美大に通うのも、遊びの延長でしかないと思っていた。
「すごい絵を見れて嬉しかったけど、俺はあんなかっこいい大人にはなれなかったなって思って、悔しくてさ」
慎吾に絵の才能がどれだけあるかなど、素人の美緒には横で見ていてもさっぱり分からない。きっと分からなかったからこそ、彼にとっては、楽だったのかもしれない。
「……クレヨン握れば、思い出せるかなぁって思ったんだ。思いつくままに、地面とか壁とか床とか全部に落書きして、母さんに怒られては泣いてた時の、あの気持ちが」
言いながら、彼は手に持っていたクレヨンを持ち上げた。
「自分の内側にあるものも、外側にあるものも、理屈なんか置き去

りでひたすら描きたくて、それが楽しくてたまらなかった。そんな気持ちが、子供のころは当たり前だったあの時の気持ちが、今はよく見えないんだ」

美緒は、慎吾を取り巻く憂鬱の内容に、実感が持てなかった。だけど、分かったこともある。何を悩んで生きているか疑問だった気楽な恋人は、寝てる間には、自分には分からない次元の何かで悩んでいるのだ。

「綺麗な絵を描くだけなら、出来るようになったのになぁ……」

美緒は慎吾に寄り添いながら、そっと、自らの唇に指で触れた。

クレヨンは乾いていたので簡単には落ちない。もう一度強く唇をこする。指先に、ほんのわずかな白が乗った。

それを見て、子供の頃に、白いクレヨンにはなんの意味があるのだろうと、考えた事を思い出す。今まではずっと、思い出しもしなかったことだ。

白い画用紙の上に、白いクレヨンを滑らせても、何も生まれなかったこと。十二色セットの箱の中で、いつまでも背丈が変わらなかったこと。

ふと、上を向いていた慎吾が、甘えるように手を伸ばした。横から抱き締められて、思わず美緒はころんと転がった。背中から抱きすくめられる形になってしまったが、乳房の上で交差する手に拘束されれば、振り返ることも難しい。

後ろから絡んだ無骨な手を見つめながら、この手の内側で眠っている感情を、美緒は想像しようとした。色が白くて、長い腕。

のっぽのクレヨンの使い道を思いついたら、ひょろ長い彼氏の考えていることも、分かるかもしれない。なんだかとっても似ている気がする。

美緒は慎吾の手の上に、自らの手を重ねる。顔に落書きをされた怒りは消えていないし、明日の手入れを考えれば憂鬱だった。だけど、湧いてしかるべき怒りは、不思議なほどにない。常識にとらわれすぎる自分には、彼の感情がいちいち眩しいのかもしれない。

だからこそ、自分たちの関係は長く続いているのだろうかと、そんなことを思った。

（後書き）

ぶっつけ本番プロットなしで、どこまで短く書けるかという習作です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5045l/

クレヨン

2010年10月8日15時00分発行